日本宋代文學學會
第9回大会プログラム

2022年11月26日(土) 13:00～17:00
Zoomオンライン形式

13:00　会長あいさつ　東 英寿

Ⅰ 研究発表 13:10～14:15

①13:10-13:40　村田 真由（大阪大学大学院）

世界の終わり ――文天祥「山河破碎」句をめぐって――

司会 奥野 新太郎（岡山理科大学）

②13:45-14:15　東 英寿（九州大学）／久保山 哲二（学習院大学）

王安石古文文体の実証的考察

司会 副島 一郎（同志社大学）

Ⅱ 第1回宋代書簡シンポジウム 14:30～16:15

JSPS科研費基盤(B)「宋代書簡に関する総合的研究」主催／
日本宋代文学学会共催

司会 東 英寿（九州大学）

①14:35-14:55 東 英寿（九州大学）

宋代書簡研究の可能性

②15:00-15:20 内山 精也（早稲田大学）

蘇軾文学における清貧と闊達 ――尺牘が明かす実相――

③15:25-15:45 平田 茂樹（大阪公立大学）

劉克荘の書信より見た「濟王冤案」と「梅花詩案」

④16:00-16:15 総合討論

Ⅲ 総会 16:30～17:00

発 表 提 要

I-① 世界の終わり ――文天祥「山河破碎」句をめぐって――

大阪大学大学院文学研究科博士後期課程 **村田 真由**

文天祥「過零丁洋」詩に「山河破碎風飄絮、身世浮沈雨打萍」とある。これは南宋の滅亡を目前にして、戦乱によって国土が破壊し尽くされた様子を表現したものである。文天祥は南宋滅亡前後の詩において、このようないわば世界の終わりを繰り返し表現している。例えば南宋滅亡後の「感傷」には「地維傾渤澥、天柱折崑崙」とあり、モンゴルの獄中での「戊寅臘月二十日空坑敗被執于今二周年矣感懐八句」には「乾坤顛倒真千劫、身世留連復一周」とある。

従来、山河や乾坤は人間の手による戦乱の影響を受けずに、安定してそこにあるものとみなされていたはずである。杜甫「春望」にも「国破れて山河あり」とあって、山河の不変性がうたわれている。では、文天祥における「山河さえも破碎される」といった表現は、どのように形成され、何を意味しているのだろうか。本発表では、唐代の杜甫や李賀の表現を取り上げてその系譜を辿りながら、北宋末の戦乱期を生きた陳与義、南宋王朝の安定期を生きた陸游や楊万里、文天祥と同時代の汪元量ら、あるいは金王朝滅亡期の元好問と比較することで、文天祥の表現がいかなる特徴を有しているのかを明らかにしたい。またそれが後世の文学にいかに継承されていくのかについても考えてみたい。

I-② 王安石古文文体の実証的考察

九州大学大学院比較社会文化研究院 **東 英寿**
学習院大学大学院人文科学研究科 **久保山 哲二**

王安石は政治面、思想面の業績が大きく、彼の文章についても思想や政治面に注目されてしまう傾向があり、これまで王安石の散文それ自体に着目して、その特色を明らかにしようとした考察は少ない。さらに、古文の大家として名高い唐宋八大家の一人に数えられている王安石について、他の唐宋八大家達の古文と比較対照して文章の特色を明らかにすることは従来全く行われていなかった。

そこで、本発表では王安石古文の特色を把握するために実証的な考察、すなわち計量文献的手法を用いて、彼の古文の特色を考察した。主成分分析を用い、文中に用いられている虚詞の出現頻度による文体分析を行った結果、論の文体にお

いて王安石は虚詞「也」を多用しており、他の唐宋八大家達とは明らかに違う傾向があることが判明した。

文中に二十一個の「也」を連用し、古来名文として名高い歐陽脩の「酔翁亭記」における「也」の多用と王安石の「也」の多用とを比較するなどして、王安石の文章に見られる虚詞「也」の使用について検討したい。

第一回 宋代書簡シンポジウム

Ⅱ-① 宋代書簡研究の可能性

九州大学大学院比較社会文化研究院　東 英寿

魯迅は『当代文人尺牘鈔』序文に「作家の日記や尺牘から、しばしば、その作品をよむよりもずっと明晰な意見が得られるし、作家自身の簡潔な注釈でもある」と記述し、作品よりも実は書簡（尺牘）から作者の明瞭な意見が得られると述べる。確かに私的な書簡には作者の心情や本音が表出されており、そのため「作家自身の簡潔な注釈」になりうるであろう。従って、書簡に見える個々の作者の心情や本音を掬い取ることで、新たな作品論や作者論を構築できるし、時には書簡の中に自分の作品（詩など）を書いて送ることもあるので作品が生まれ出た経緯を窺うこともできる。また、書簡のやり取りや内容を辿ることで当時の人々のネットワークやコミュニティの形成という社会的な構造も明らかにできる。さらに、本来公開を前提としていなかった書簡が、後に全集に収録されて伝わってきた経緯を辿ることで、書簡の受容・流通や全集編纂の過程も考察できる。このように、書簡に着目することで様々な研究の可能性が生まれてくることを確認したい。

Ⅱ-② 蘇軾文学における清貧と闊達 ――尺牘が明かす実相――

早稲田大学教育･総合科学学術院　内山 精也

北宋の蘇軾（1037-1101）は今日まで大量の尺牘資料を伝えている。その数は欧陽脩を唯一の例外として、北宋随一といってよいであろう。蘇軾と同時代の士大夫たちもおそらくは蘇軾と同様、同僚や知友との間で尺牘を送り合い、日常的に情報交換し合っていたに相違ないが、それらの強半は残念ながら時の経過とともに散逸してしまった。

蘇軾の書簡・尺牘類については、故村上哲見先生の研究によって、つとにその流伝の跡が詳らかにされており、中華書局の『蘇軾文集』（底本：明・茅維編『蘇文忠公文集』75巻）でも、巻50～61の12巻に亘って、送った人物ごとに分類整理され、しかも各々が原則、編年編集されている。これらの尺牘には、詩文にはめったに表れることのない、もう一人の蘇軾の姿が保存されている。

今回は、黄州と儋州時代の尺牘に着目し、詩＝文学の世界とは相異なる蘇軾の実像を炙り出してみたい。

Ⅱ-③　劉克荘の書信より見た「濟王冤案」と「梅花詩案」

大阪公立大学大学院文学研究科　　平田 茂樹

「濟王冤案」と「梅花詩案」は何れも史彌遠専権期の言論統制を代表する事件であり、これまで幾多の研究成果が出されてきた。本報告では前者発生時においては「知建陽縣」の任にあり、史彌遠死去に伴って開始された理宗親政の後にはたびたびこの問題に言及し、後者においては直接、当事者となって疑獄に巻き込まれた劉克荘の視座から二つの事件を辿っていく。なお、この二つの事件を通して劉克荘は度重なる弾劾を受け、就任、弾劾、辞任（罷免）、それに伴う祠禄官生活を繰り返す、10年ほどに及ぶ不安定な時期を過ごすこととなる。この時期における劉克荘の交遊とネットワークの考察の鍵となるのが書信である。劉克荘の文集には「書」と「啓」という異なる書信が残されており、「書」については分析されることが多いが、挨拶状的な性格を有する「啓」については十分な考察が行われていない。一方、劉克荘の「啓」を分析していくと、彼を取り巻く官僚、文人、士大夫の複雑な人間関係や当時の官界での交際慣行なども浮かび上がってくる。そこで本報告では書信を主たる材料として、政争に翻弄される南宋士大夫の交遊の様相を明らかにする。

以 上